

熊来の迎前寺遺跡
発掘調査報告書

1981

山形県教育委員会

くま
の
まえ
らい
迎
前寺
跡
遺跡
発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和52・54年度に実施した、県営圃場整備事業にかかる最上町熊の前遺跡・大石田町来迎寺遺跡の調査結果をまとめたものであります。

両遺跡とも縄文時代中期を主体とする遺跡で、当時の生活を物語る多くの出土品が発掘され、先人の歴史をたどる貴重な成果を得ることができました。現在、県内において確認されている遺跡数は、およそ2400ヶ所を数えますが時代区分では本遺跡の時期のものが一番多く占めております。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは、増加の傾向にありますが、地域の実態に応じ生産及び流通体制の整備を行ない、農業経営の安定化とその健全な発展を図る事業と、悠久の歴史を包む埋蔵文化財の保護との間には多くの諸問題をかかえております。このような問題の調整をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においても一層の努力を重ねてまいる所存であります。

このような意味において本書が、埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終りに、調査にあたって適切な御指導と多大なる御協力をおしまなかった関係各位に、心から感謝申し上げます。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　　言

- 1 本報告書は、県営圃場整備事業に係るため、山形県教育委員会が主体となり実施した二つの遺跡の緊急発掘調査報告書である。遺跡名、調査期間、調査体制は下記の通りである。

遺跡名	熊の前遺跡	遺跡名	来迎寺遺跡
調査主体	山形県教育委員会	調査主体	山形県教育委員会
調査協力	最上町教育委員会	調査協力	大石田町教育委員会
調査期間	昭和52年7月11日～8月12日	調査期間	昭和54年4月23日～6月15日
調査担当	山形埋蔵文化財緊急調査団	調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者	調査員 佐藤鎮雄・名和達朗 手塚 孝 (県教育庁文化課)	調査担当者	調査員 佐々木洋治 名和達朗・佐藤義信 (県教育庁文化課)
協力員	長沢正機		
	上野 貞		

- 2 挿図及び文中の記号は、S T—住居跡、E L—炉跡、E P—柱穴、S K—土壙、S X—性格不明土壙、G—グリッドとしてそれぞれ番号数字で示した。
- 3 本報告書の作成については、名和達朗・阿部明彦が分担執筆し、挿図・図版作成にあたっては、津留房子・黒金佳子・枝松美保子・山口由紀子がこれを補助した。本書の編集は名和達朗が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

目 次

熊の前遺跡

I 調査の経緯	1
II 遺跡の概要	2
III 遺構	5
IV 遺物	
1 土器	7
2 石器	11
V まとめ	13

来迎寺遺跡

I 調査の経緯	14
II 遺跡の概要	16
III 遺構	18
IV 遺物	
1 土器	19
2 石器	21
V まとめ	22

挿図目次

第1図 熊の前遺跡全体図	
第2図 熊の前遺跡位置図	1
第3図 熊の前遺跡土層図	2
第4図 熊の前遺跡遺構配置図	3
第5図 熊の前遺跡遺物分布図	4
第6図 13号住居跡・14・15・56号土壤	

..... 5

第7図 44号住居跡・68・92号炉跡	6
第8図 熊の前遺跡出土石器（1）	11
第9図 熊の前遺跡出土石器（2）	12
第10図 来迎寺遺跡位置図	14
第11図 来迎寺遺跡全体図	15
第12図 来迎寺遺跡土層図	16
第13図 来迎寺遺跡遺構配置図	17
第14図 4号住居跡・14・25・27・48号 土壤	18
第15図 来迎寺遺跡出土土器	19
第16図 R P 10埋設土器出土状況及び実 測図	20
第17図 来迎寺遺跡出土石器（1）	21
第18図 来迎寺遺跡出土石器（2）	22

図版目次

図版1 熊の前遺跡遠景 熊の前遺跡出土 土器（1）	
図版2 熊の前遺跡出土土器（2）	
図版3 熊の前遺跡出土土器（3）	
図版4 熊の前遺跡出土土器（4）	
図版5 熊の前遺跡出土土器（5）	
図版6 熊の前遺跡出土土器（6）	
図版7 熊の前遺跡出土土器（7）	
図版8 来迎寺遺跡遠景 4号住居跡R P 10埋設土器	

..... 5



第1図 熊の前遺跡 全体図

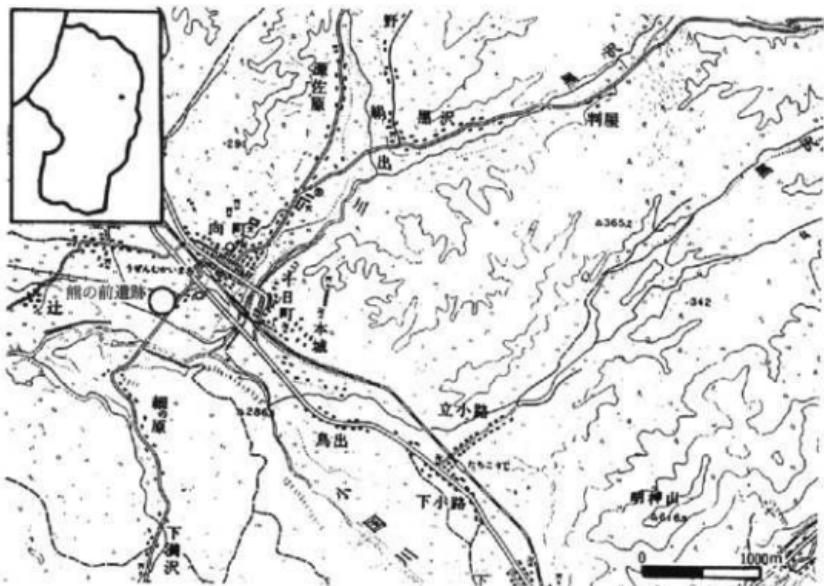
熊の前遺跡

I 調査の経緯

熊の前遺跡は、山形県最上郡最上町大字向町字熊の前130他に所在する。その一帯は、以前から遺物の採集されることで知られ、「山形県遺跡地図」(昭和53年3月・山形県教育委員会編)にも914の番号で記載されている。

ここに昭和52年度県営圃場整備事業が実施されることになり、前年に予備調査が実施された。その結果、縄文時代中期の集落跡であることが確認され、これに基づいて県教委文化課・県農林部耕地2課・最上町教委の間で協議が行なわれ、昭和52年7月11日から同年8月12日まで緊急発掘調査を実施するはこびとなつた。

調査は実質24日間にわたって行なわれ、まず遺跡全体に 2×2 m のグリッドを設定し、各グリッドは東西X軸・南北Y軸の座標で番号区分した。最初は、遺跡の範囲・遺構の集中か所は握のため20m間隔で坪堀りを行ない、遺構・遺物の検出状況に応じて順次拡張を実施した。その結果、28~39-29~36Gに多量の遺物が確認され、本地区を精査か所とし遺構・遺物の検出及び記録等を行ない、最終的には調査区全体の実測・写真撮影を実施し、調査を終了した。



第2図 熊の前遺跡 位置図

II 遺跡の概要

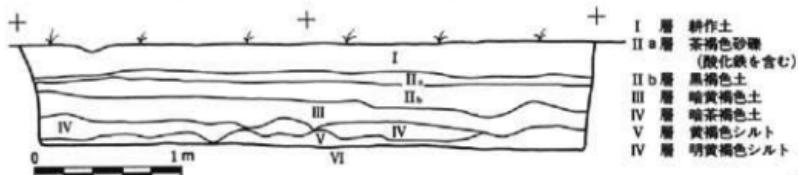
向町盆地は、東西約7.5km・南北約5km山間盆地を呈し、それをとりまくように急峻な山々が連なる。各峰々を源としていくつかの河川が形成され、地区中央を西流する小国川へと注ぎ込む。これらの河川に沿った段丘あるいは微高地上には、各時期にわたり遺跡の分布がみとめられる。現在、最上町管内では41か所の遺跡が確認されており、古くは旧石器時代から鎌倉・室町時代に区分される。

熊の前遺跡は、小国川と綱出川との合流点に近く、小国川左岸の河岸段丘上に立地し、標高201.5mを測る。遺跡の西方2kmには、縄文中期の水木田遺跡、北方1.5kmの綱出川右岸には、縄文前期末～晩期の水上遺跡が確認されている。とくに水木田遺跡は、昭和53年4月～9月にかけて調査が行われ、大規模な集落跡であることが把握されている。一般に小国川沿いの遺跡は、比較的大規模の集落を呈し、各支流河川沿いのは中小規模で量的密度が高い傾向を示すようである。

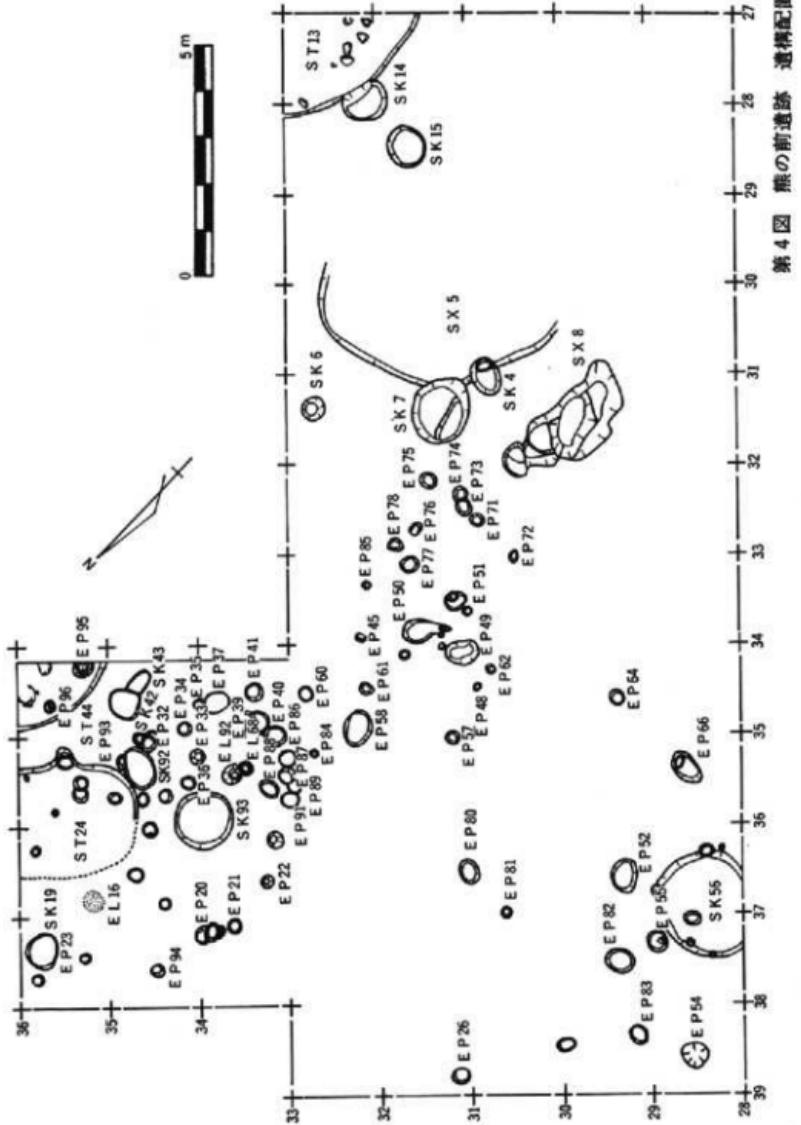
本遺跡の場合も、東西300m、南北200mの広がりを示し、遺物量も大である。今回の調査は、遺跡の西側にあたる。

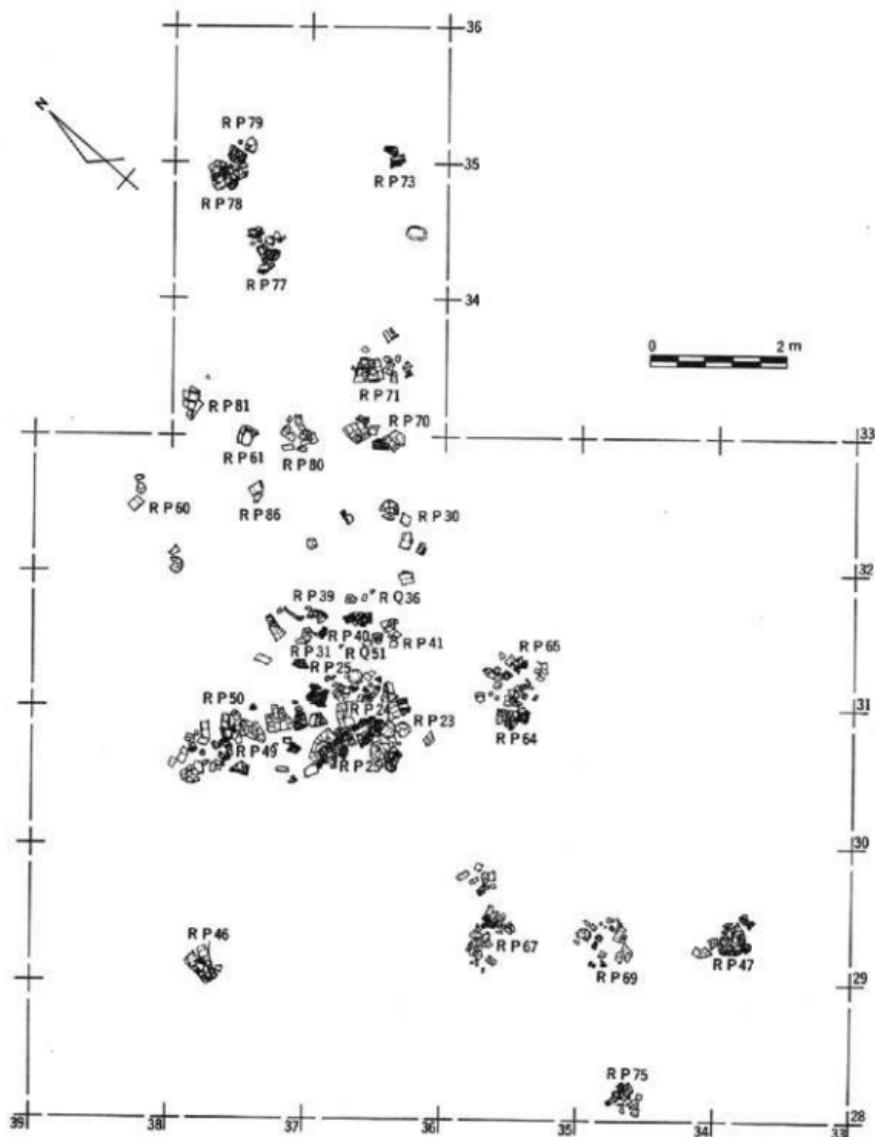
遺構・遺物は、遺跡の南西側にまとまりがみとめられ、段丘の縁辺付近に位置する。遺構は、ほとんどが精査区の東側に集中し、確認面は、V層上面である。住居跡3棟、土壙10基、ピット多数が検出されたが、住居跡はほとんど調査区間に確認され、全体プランは未検出である。ただしE L16・68・92の炉跡がみとめられることから、さらに数棟の住居跡の存在が推定される。とくに、E L68・92は埋甕炉と考えられ、周囲を円形にピット列が並び、住居跡となる可能性が強い（第4図）。

遺物は、遺構の検出地区と大体同じであるが、グリッドでやや西にずれて分布する傾向を示す。包含層は、II b～III層でIII層上面を主体とする（第3図）。量的には、総数が整理箱で90箱、うち石器は約10箱程度である。まとまりを示すか所は、37・38-31・32Gで一括土器が重なり合って出土している（第5図）。また量的には少ないが、34～38-30G、37・38-33～35G等にも一括土器の分布がみとめられる。37・38-31・32Gは、遺構の未確認地区であり、出土状況からみて比較的短期間に廃棄されたものと考えられる。



第3図 熊の前遺跡 土層図





第5図 熊の前遺跡 遺物分布図

III 遺構

今回の調査では、ほとんどが部分的な検出のみである。時期は、出土遺物の検討により縄文時代中期大木8a式期に併行するものと考えられる。本項では、確認し得た以下の遺構を代表させて説明する。

13号住居跡（第6図）

28-32・33Gに位置し、全プランの4分の1検出し得たのみで大半は、調査区外である。平面形は、円形ないし橢円形と推定される。検出範囲は、東西230cm・南北294cmである。床面は、ほぼ平坦を呈し、直径20~30cm大の河原石を堆積する。壁は斜めに掘り込まれ、深さ20cmを測る。さらに西側において14号土壤を切っている。出土遺物は、覆土内より土器片を若干出土する。

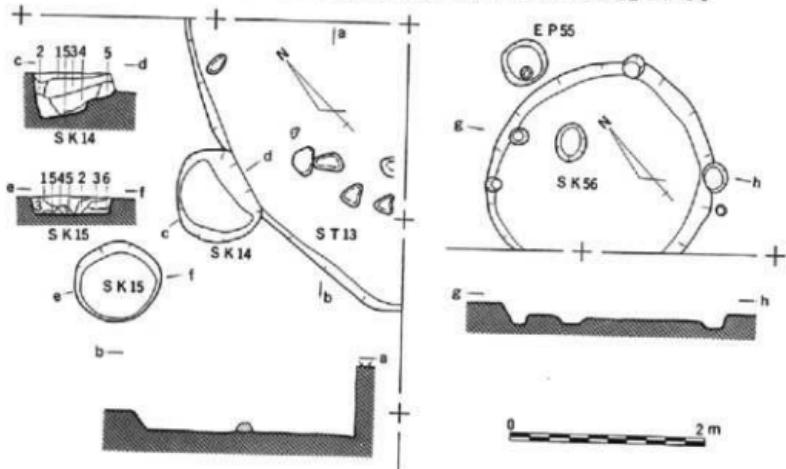
44号住居跡（第7図）

35-36Gに位置し、プランの西側東西2m・南北2mの範囲の検出である。

平面形は、円形ないし橢円形と推定される。床面は、ほぼ平坦でE P95・96のピットが壁際をめぐる。ピットは、直径20cm、深さ26cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、深さ約10cmを測る。出土遺物は、覆土内よりE P84及びE P96より土器片を少量出土する。

68・92号炉跡（第7図）

36-34Gに位置する。切り合からE L68→92の新旧関係を示す。内部にR P82・85土器が正立して埋められており、焼土・炭化粒子を多量に含み埋甕炉跡と考えられる。周辺にピット群が配列されていることから、住居床面に位置するものと推定される。



第6図 13号住居跡・14・15・56号土壤

14号土壤 (第6図)

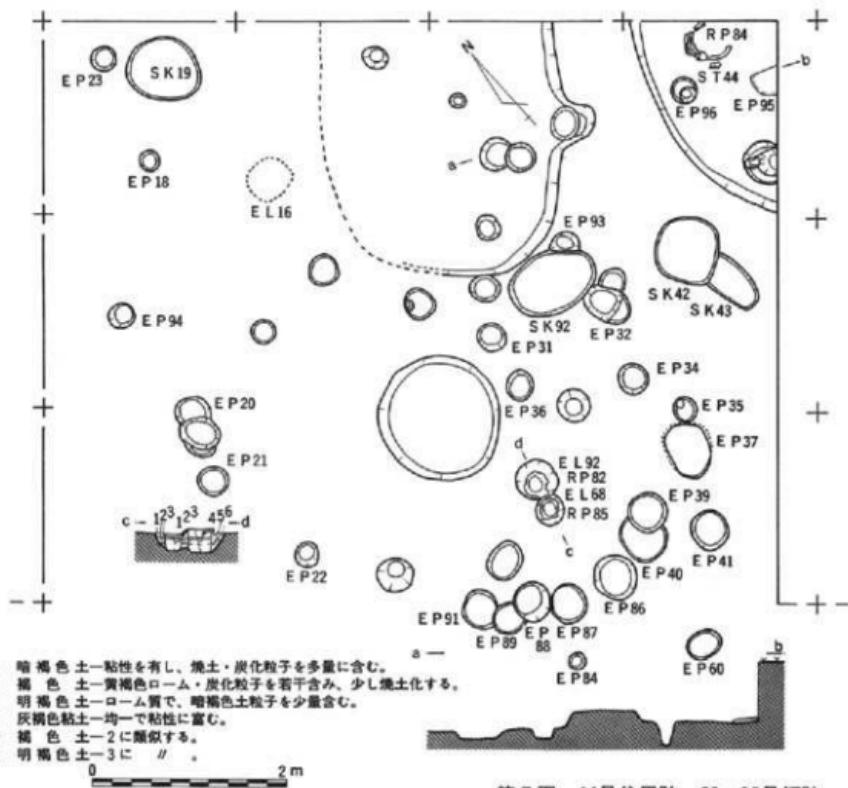
29-33Gに位置する。円形を呈し、直径1m・深さ45cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壇底は西側に傾斜しやや段を示す。覆土は5層に分けられ、暗褐色土を主体とする。1・2層は少し暗い色調で、3~5は黄褐色土砂混じりで若干明るい色調である。

15号土壤 (第6図)

39-32Gに位置する。東西90cm・南北82cmの梢円形プランである。壁は垂直に掘り込まれ、深さ20cmを測る。壇底はほぼ平坦で、若干北側に傾斜する。覆土は6層に分けられ、部分的に黄褐色砂質土混じりの暗褐色土である。

56号土壤 (第6図)

37-38-29Gに位置する。直径230cmの円形を示し、壁は斜めに掘り込まれ、深さ10cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁際を直径20cm・深さ20cmのピットが4本めぐる。



第7図 44号住居跡・68・92号炉跡

IV 遺物

1 土器

縄文土器は、各遺構や遺物包含層から整理箱で約80箱以上出土している。遺構内出土の土器は、R P82・R P85などの炉埋設土器を除いて大部分が小破片であり、出土数も多くない。一方、遺構群の西側周辺に認められた遺物包含層からは、一括土器として取り上げた土器が80個体以上あり、その他に多数の破片が出土している。これら土器の出土状況は第5図に示す通りで、単体で出土するもの、2~3個体でまとまるもの、10数個体が重なり合ってまとまるものなど一様ではない。以下では、これらの土器を器形・文様帶・文様などから類別し、その編年的位置付けを行うが、分類に際しては器形や文様帶の判断できるものを主としてあつかった。

第I群 <大木7b式に比定される土器群>

1類 (図版6-1・9・10・11・13・15・16, 図版7-1)

撚糸の横位圧痕文を主文様とするもので、平行・孤状などの文様構成を持つものを一括する。器形では、体部が張り、口縁の外反する深鉢と、直線的に開き口縁が四波状する深鉢のほか、大形で四波状の口縁を持つもの、コップ状の深鉢と思われる破片がある。文様は、口唇部と口縁部に施文されるものが大半で、副次的な文様に竹管爪形文、交互刺突文、縦位並列の短い撚糸圧痕文などがある。

2類a (図版2-1, 図版3-1・2, 図版5-1)

口縁に主な文様帶をもつもので、隆線と沈線、あるいは沈線だけで描かれる孤状文が特徴となる。器形は、体部の張らないキャリバー形深鉢を主体とし、口唇が内側に肥厚して断面が「く」の字状を呈す。文様は、連続的な孤文による多単位のもの (R P86) と、隆線や沈線で四区画されるもの (R P64・図版3-2) とがあり、区画されるものでは、各単位間の縦に延びる区画線や接続点に刻目を付した横円貼付文を配したり (図版3-2)、大ぶりな波状口縁となっているなど、何らかのアクセントを認める。副次的な文様では、沈線の波状文・渦巻文・刺突文 (R P64)、短い縦位の撚糸圧痕文 (R P65)、交互刺突文 (図版3-2、R P86) がある。地文は、規則的な単節縄文の縦位施文が大半で、結節や結束を伴うもの、異条縄文などを認める。口縁における地文は、充填縄文様に不規則で種々の方向から施文される。但し、縄文施文後に文様が付けられている。

2類b (図版7-2)

器形、文様構成では前類に近似する。文様帶は、口縁部と体部に認められ、口縁の文様は沈線の孤文を主体とし、その内部に三角文や、結節沈線による円文が配されている。頭部が若干無文となり、その下に隆線と沈線が巡る。体部文様は、頭部隆線から「Y」字状

に垂下し、体部下半で終る。また、付隨する沈線が矢印状に張り出している。地文は、口縁部に単節繩文が主として横位に施文され、体部には結束ある羽状繩文が縦位に規則的に施文される。口縁部上端に施文された平行する沈線には、部分的に交互刺突文が施文される。

第II群 <大木7b式から大木8aへの移行期の土器群> (図版3-3・4)

口唇部・口縁部・体部に文様帯を持つもので、口縁に弧状の文様、体部に沈線意匠文を持つのが特徴となる。器形は、頸部に段を持ち、体部の直線的なキャリバー形の深鉢 (RP46) と、口縁がゆるく内窵し、体部の強く張る深鉢 (RP57) の二種がある。文様帯は、小波状突起の付く口唇部、隆線と沈線による円弧文の施文される口縁部、二本単位の沈線で描出されるU字・円文・梢円文などの組合さる体部文様帯から成り、口縁部の文様は、第I群2類土器に近似する。地文は、口縁から体部にかけて単節繩文が縦位に施文されるもの (RP46) と、同一原体を口縁部に横位施文するもの (RP57) がある。体部の文様は、頸部の平行する沈線から垂下する二本の沈線によって二単位に区画される (RP46)。RP57は、頸部に橋状の小把手を四個持ち、口唇の小突起と対応している。この把手には縦位、あるいは横位に4~5条の撫糸圧痕文が施文される。副次的な文様として、交互刺突文、沈線の溝巻文、撫糸圧痕文 (RP57) が認められる。

第III群 <大木8a式に比定される土器群>

1類 (図版5-2・3・4)

口縁に並列する短い縦位の撫糸圧痕文を持つ。器形は、口縁が外傾し、頸部でくびれ、体部の張る深鉢や、口縁が彎曲気味でキャリバー形に近い深鉢がある (RP35)。文様帯は幅のせまい口縁部に限られ、撫糸圧痕文が単独で施されるもの、口縁の上下に隆起線を巡らし、その内部に撫糸圧痕文を施すものがある (図版5-3)。地文は、単節繩文の規則的な縦位施文で、結節を伴う例 (RP52) もある。

2類a (図版5-5)

口唇部・口縁部に文様帯を持ち、口縁の文様が多帯化して二帯となる。器形は、体部の張るキャリバー気味の深鉢で、口唇が内側に肥厚して断面「く」の字状を呈す。文様は、口唇に無調整の粘土紐を貼付する小波状文やS字状隆起文を四単位で施文し、口縁に同じくやや大ぶりな山形文、その下部に縦位の撫糸圧痕文を並列に施す。地文は、頸部下から体部へ単節繩文が縦位に施文され、結節を伴っている。

2類b (図版2-5・図版5-6)

口縁部文様が多帯で、粘土紐の波状文、S字状隆起文、縦位の撫糸圧痕文が主文様となる。器形は、口縁部の幅がせまく、体部の張るキャリバー形深鉢を主体とする。地文は、

単節縄文の規則的な縦位施文で、RP100は結節文を伴う。

2類c (図版5-7)

口縁部・体部に文様帯を持つもので、口縁にはS字状モティーフが隆起文で配され、一部橋状の把手状となる。以下、無調整の粘土紐の小波状文、縦位の撚糸圧痕文と続き、文様帯が多帶化している。体部文様は、頸部の段、および二条の沈線により画され、三本一組の沈線を単位として施文されるが、破片のためその意匠・構成は明かでない。地文は、頸部下端から体部へ、単節縄文が縦位に施文される。

2類d (図版6-2)

口唇部・口縁部・体部文様帯を持つもので、口縁部のS字状隆起文が特徴的である。器形は、口縁がいくらか内彎する程度で体部の張りもほとんどない。文様は、無調整粘土紐による口唇部の小波状文、口縁のS字・十字を主なモティーフとして連結する隆起文、体部の三本一単位で描かれる沈線意匠文から成る。体部文様帯は、頸部の四条の平行沈線と、二列の爪形文で口縁部文様帯と画されている。地文は、単節縄文の規則的な縦位施文で、口縁の隆起線文下端から施される。隆起線の十字・梢円・S字状文には、刺突文が施されて加飾される。

3類a (図版6-17)

口縁にS字状モティーフの大きな把手を持つ小形の土器で、文様帯の構成は、口唇部・口縁部・体部の三帯からなる。器形は、口縁がやや開き、立上りの直線的な深鉢である。文様は、口唇の内面と把手部分に無調整の粘土紐を波状に貼付し、口縁上端に刻目文、その下段に縦位並列の撚糸圧痕文を施している。体部は、頸部の平行する三条の沈線で口縁と画される。体部文様は、隆線をはさむ左右各二条の沈線を単位として描出される。地文は、単節縄文の縦位施文で、頸部上端から施される。

3類b (図版7-4)

文様帯の構成、器形などは前類と同一であるが、口縁部の撚糸圧痕文が欠落し、RP77bでは地文の縄文をすり消して無文帯としている。頸部は、その上下に粘土紐を巡らし、内部に五条の平行する沈線を施す。体部文様は明確でないが、三本の沈線を単位として描出されるのが判別できる。地文は、口縁から体部にかけて単節縄文が施されるが、頸部では粗くすり消される。

4類a (図版2-4・図版5-9)

口唇部・口縁部・体部上半に文様帯を持ち、口唇が外側に肥厚している。器形は、口縁が外反し、体部のやや張る深鉢を主体とする。文様は、口唇に撚糸圧痕文と粘土紐による小波状文が施されるRP85と、粘土紐を上下に巡らし、内部に刻目文を施文するRP82が

ある。口縁はいずれも縦位の燃糸圧痕文が巡る。体部上半の文様は、沈線を主体とし、間に波状沈線が入る。地文は頸部から単節繩文が縦位に施される。

4類b (図版4-1)

口唇部・口縁部・体部上半に文様帯を持つ。器形は体部の張るキャリバー形深鉢で、口縁の彎曲が強い。文様は、口唇部に数個の刻目文があり、口縁部では二本単位の無調整粘土紐による渦巻文と十字形文の組合せ文様が施され、渦巻状の小突起から垂下する二本の粘土紐で四区画される。頸部から体部上にかけては、一条の波状沈線をはさんで、三条の平行沈線が施文され、地文は、口縁下端から単節繩文が縦位に施される。

5類a (図版2-3・図版4-3)

口縁に文様帯の限られるもので、器形は体部の張るキャリバー形深鉢が主体となる。文様は、無調整粘土紐による波状文・X字文・渦巻文があり、文様帯の上、下端に粘土紐と沈線を1~3条巡らして区画される。地文は、口縁部・体部ともに同一原体による単節繩文が縦位に施される。

5類b (図版4-3)

口唇部・口縁部に文様帯があり、無調整粘土紐による十字文などが主要なモティーフとなる。器形は、口縁がやや内彎する程度で、全体にゆるく直線的に開く深鉢である。文様は口唇に刻目文、口縁に粘土紐による意匠文が施される。地文は口縁から体部にかけて単節繩文が縦位に施される。

6類a (図版7-5・6)

口唇に一個のS字状モティーフの把手が付き、キャリバー形の深鉢が特徴である。文様の構成は、口縁部の粘土紐による渦巻文・孤文、頸部の平行する多数の沈線と間に入る波状沈線文、体部の三本を一単位として描出される沈線渦巻意匠文からなる。口縁部、体部文様帯とともに二単位構成である。器形は、胴の張るものと、直線的に立上るキャリバー形土器の二種がある。地文は、単節繩文が口縁から規則的に縦位施文されるR P31と、口縁部に体部と同一原体を横位に施文するR P39がある。

6類b (図版7-3)

基本的な器形・文様構成では前類のR P31に近似する。相異点は頸部の波状沈線の欠落と、体部文様の構成で、R P38では、縦位の長方形区画を並列に配している。

以上、深鉢を中心にI~III群に大別し、さらにその中で細別を行ったが、類別が十分でないため、無文地で四個の橋状把手を持つR P25や、浅鉢形土器(R P61・71)、円筒土器の系統を持つR P53等については触れ得なかった。深鉢形土器も以上の類別以外の類型があり(R P44・73、図版4-4~14)、いずれも第III群に含まれると考えられる。

2 石 器

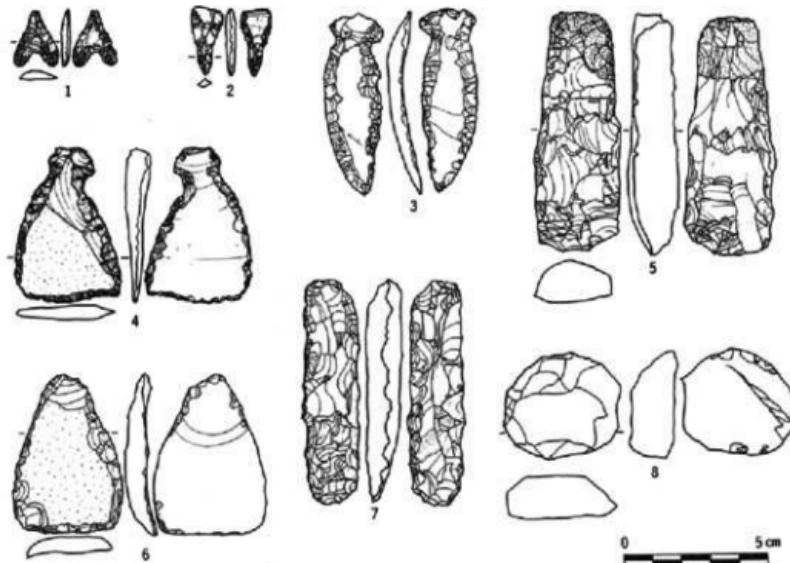
石器は、総数260点出土し、器種別では石鎌・石錐・箆状石器・搔器・石核・剝片・磨製石斧・凹石・石皿・石棒・円板状石製品に分けられる。石材は主に硬質頁岩が用いられ、他に流紋岩・石英・鉄石英・玉髓・黒耀石・チャート・安山岩・砂岩等が利用されている。

石 鎌 (第8図1) 横長剝片を用いた無茎石鎌である。先端は鋭く作出されているが、脚部にかけてはやや丸味を呈し、基部を深く抉り込んでいる。量的に少なく91-40Gより1点のみ出土している。石質は、硬質頁岩である。

石 锥 (第8図2) 全体に二等辺三角形状を呈し、中央から入念に剥離を加えて針部を作出している。基部は、両端のみに剥離が施され、わりと細身である。1点のみの出土である。石質は、鉄石英である。

石 匙 (第8図3・4) つまみを形成する石器で縦形と横形とに分けられるが、今回出土したのは縦形のみ、4点である。大きく分けて細長で先端が尖るもの（3）と、幅広で直線的な刃部を形成するもの（4）がある。両者とも両面から加工され、つまみ部が大型である。石質は、硬質頁岩である。

箆状石器 (第8図5・7) 6点出土している。短冊状の形態を示し、両面加工が施され、断面形態は凸レンズ状を呈する。身の厚い石器であるが、刃部にかけて薄手で鋭利に



第8図 熊の前遺跡 出土石器 (1)

仕上げられているものが多い。石質は、硬質頁岩である。

搔 器 (第8図6) 刺片の先端や側縁部に剥離を施し、刃部を形成する石器群である。

一般に不定形な刺片が多いが、疊核の側縁を剥離して形成しているものもみとめられる。

11点出土し、硬質頁岩・石英の石材である。

石 棱 総数で5点出土している。不定形な形状が多い。石質は、硬質頁岩・チャート等がみられる。

刺 片 石器製作の際できたもので、総数212点を数える。中に使用による刃こぼれを有するものもみとめられる。

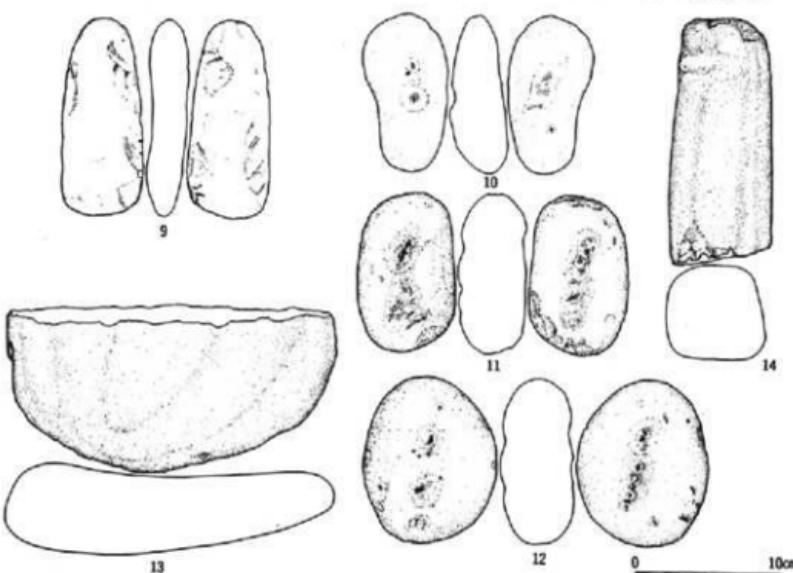
磨製石斧 (第9図9) 2点出土している。安山岩・砂岩等の石材を用い、磨く前にある程度打ち欠いて形を整えたらしく、剥離痕をとどめるもの(9)も出土している。

凹 石 (第9図10~12) 円形ないし橢円形な扁平な河原石を用い、両面に1~3個の凹を有する。16点出土。

石 盔 (第9図13) 半分を欠いているが、91-40Gより1点出土。

石 棒 (第9図14) 棒状の石材を磨いて隆蒂をめぐらし、頭部を形成する。51-40Gより1点出土。

円板状石製品 (第8図8) 扁平な河原石の周囲を打ち欠き成形する。1点出土。



第9図 熊の前遺跡 出土石器 (2)

V まとめ

今回の調査は、県営圃場整備事業にかかる緊急発掘調査である。調査は、遺跡の南西側を中心に行ない。以下のようにまとめられる。

検出遺構は、住居跡3棟、土壙10基、ピット多数に分けられ、調査区の東側よりに分布する。住居跡は、ほとんどか部分的な確認であり、その全体については把握し得なかった。また、埋甕炉と思われるE L68・92は、少なくとも2軒の住居跡の存在を推定し得るが、掘り込みが浅く、床面がIII層中で形成されていることもあり、プランは未検出である。土壙は、円形ないし稍円形の平面形を示し、深さ20~50cmと比較的浅く掘り込んでいる。時期的には、各遺構とも出土遺物の検討から縄文時代中期大木8a式併行と考えられる。

出土遺物は、整理箱で90箱出土しており、土器約80箱、石器約10箱の割合である。土器は、深鉢を主体として浅鉢、小形壺等が含まれる。その分布は、概して遺構群の西側に多く出土し、特徴ある廃棄状況を示している。遺構内出土は、量的には少なくほとんど破片のみである。時期的には、器形・文様を中心に縄文中期大木7b・8a式併行に大別される。

石器は、量的に凹石が多く次いで搔器・鏟状石器の順になっている。調査区によるものなのか、石錐・石錐等の打製石器が極端に少ない数値を示している。ただし剝片の石材では黒耀石・石英・チャート等、完成品のないものもあり、数量が若干増加すると思われる。

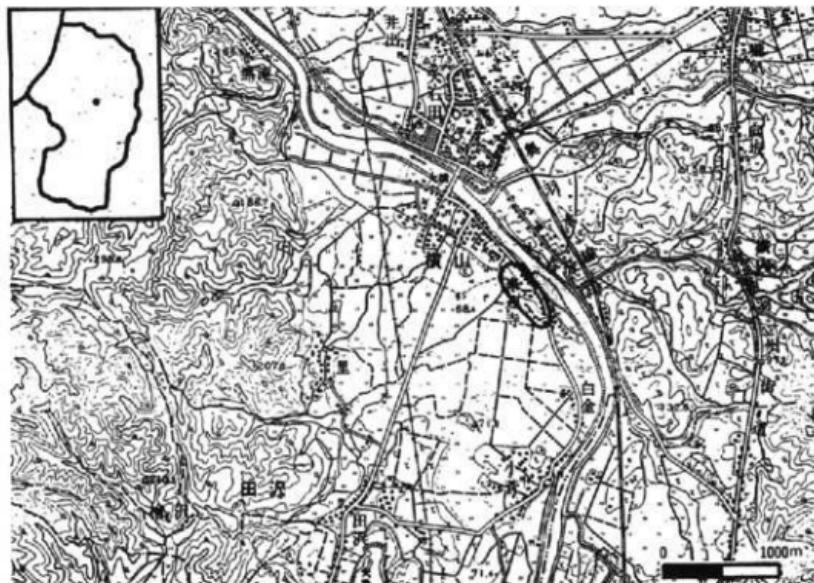
来迎寺遺跡

I 調査の経緯

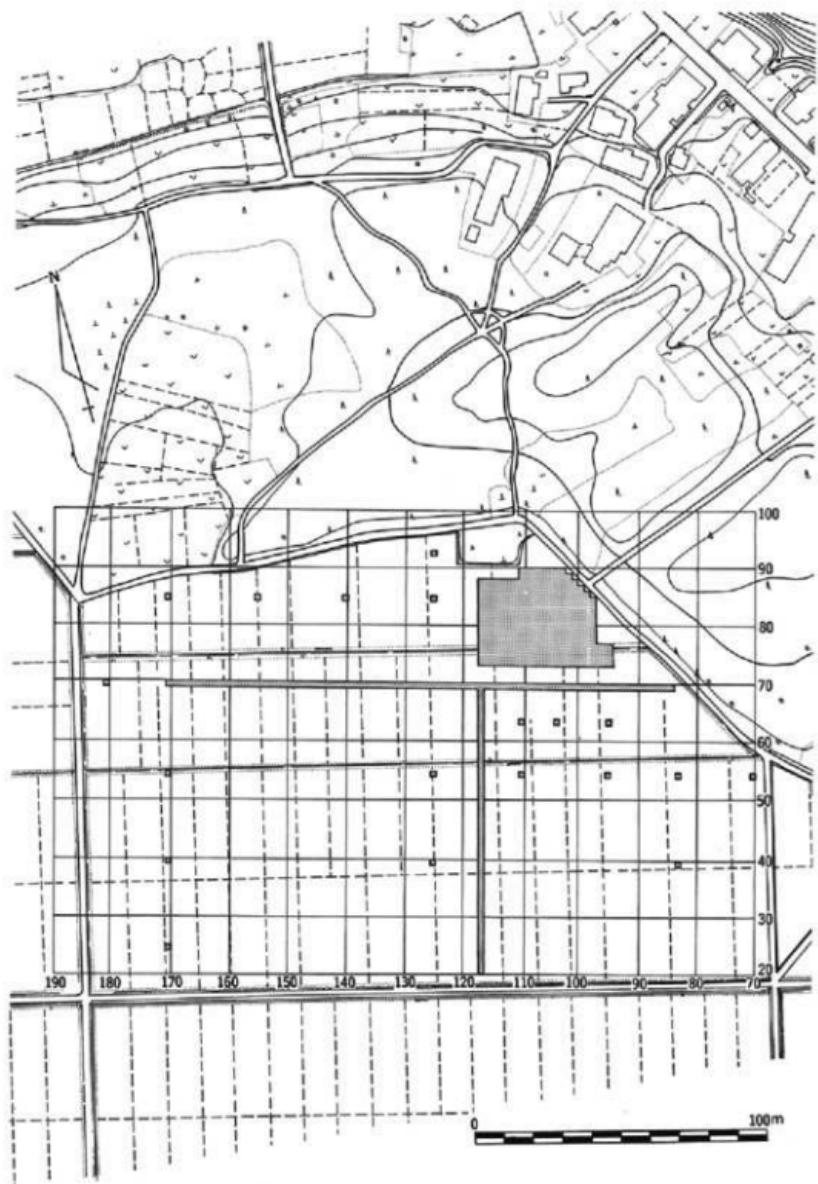
来迎寺遺跡は、北村郡大石田町大字横山字来迎寺に所在する。付近一帯は、以前から道路改修・耕作の際土器・石器が採集され、町内においても早くから知られていた所である。そのため、「山形県遺跡地図」(山形県教育委員会編)にも地図番号813縄文時代の集落跡として記載されている。

ここに昭和54年度から県営圃場整備事業・横山地区が実施されることになり、県教委文化課は、昭和53年度に分布調査を実施した。その結果に基づき、昭和54年4月県教委文化課・村山平野土地良事務所・大石田町横山土地改良区・大石田町教委の間で協議が行なわれ、昭和54年4月23日から同年6月15日まで緊急発掘調査を実施するはこびとなった。

調査は、実質33日間行なわれ、最初調査区全体に 2×2 m単位のグリッドを設置し、東西X軸・南北Y軸を決定する。つぎに遺跡全体の範囲、遺構・遺物の集中する地点を把握するため、坪掘り及びT字形にトレーニチを入れ、調査区北東の雜木林よりに遺物がまとまることを明らかにする。ここを精査区として順次拡張を加え、遺構・遺物の検出及び記録を実施した。



第10図 来迎寺遺跡 位置図



第11図 来迎寺遺跡 全体図

II 遺跡の概要

大石田町は、地区中央部を最上川が北上しその両岸には、尾花沢Ⅰ面・尾花沢Ⅱ面で代表される段丘が発達する。現在町管内では、63か所の遺跡が確認され、細石刃が発掘された角二山遺跡（県指定史跡）をはじめ、縄文時代期初頭の集落跡である庚申町遺跡、縄文時代晚期の土器が多く出土した玉ノ木平A遺跡など、旧石器～歴史時代の良好な遺跡が明記されている。

来迎寺遺跡は、それら遺跡の中でも大きさが東西約400m、南北約200mを測る大規模な遺跡に入れられる。標高69m、最上川左岸の段丘上に立地し、地目は杉林・畑・宅地・水田・道路である。特に杉林の中は、後世の擾乱があり入らず保存状態が比較的良好である。さらに所々には、直径2～3mの墳墓が認められる。

今回の調査は、遺跡の南西側の水田部分である。

遺構・遺物は、調査区の北側と南側に分布し、中でも北側の林寄りに多く出土する傾向をもつ。中央部分は、ほとんど希薄である。

遺構は、住居跡1棟・土壙15基・ピット21基・性格不明土壙12基検出され、確認面はIII層上面である。土壙は、調査区をとり囲むように周辺に分布するのが、ピットは散発的に全体にみとめられるものの、105～109-86～90Gに集中して確認される（第13図）。

遺物は、調査区の北側から杉林にかけて多く出土し、総数が整理箱19箱である。そのうち土器12箱、石器7箱である。包含層は、II層であるが、かなり擾乱が入り土器のほとんどが破片である。一括土器で検出し得たのは、104-78GのR P10理設土器のみである。

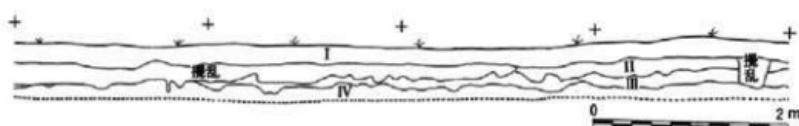
遺跡の層序は、調査地点が段丘の平坦面であるため、やや北側にゆるやかに傾斜した堆積状況を示す。全体に擾乱を受けているが、基本的に次の4つに分けられる（第12図）。

I層 耕作土 黒ボクを呈し、褐色土粒子を多量に含み、粘性を有す。

II層 暗黒褐色土 砂質性で褐色土粒子を多量に、風化礫粒子を若干含む。遺物包含層である。

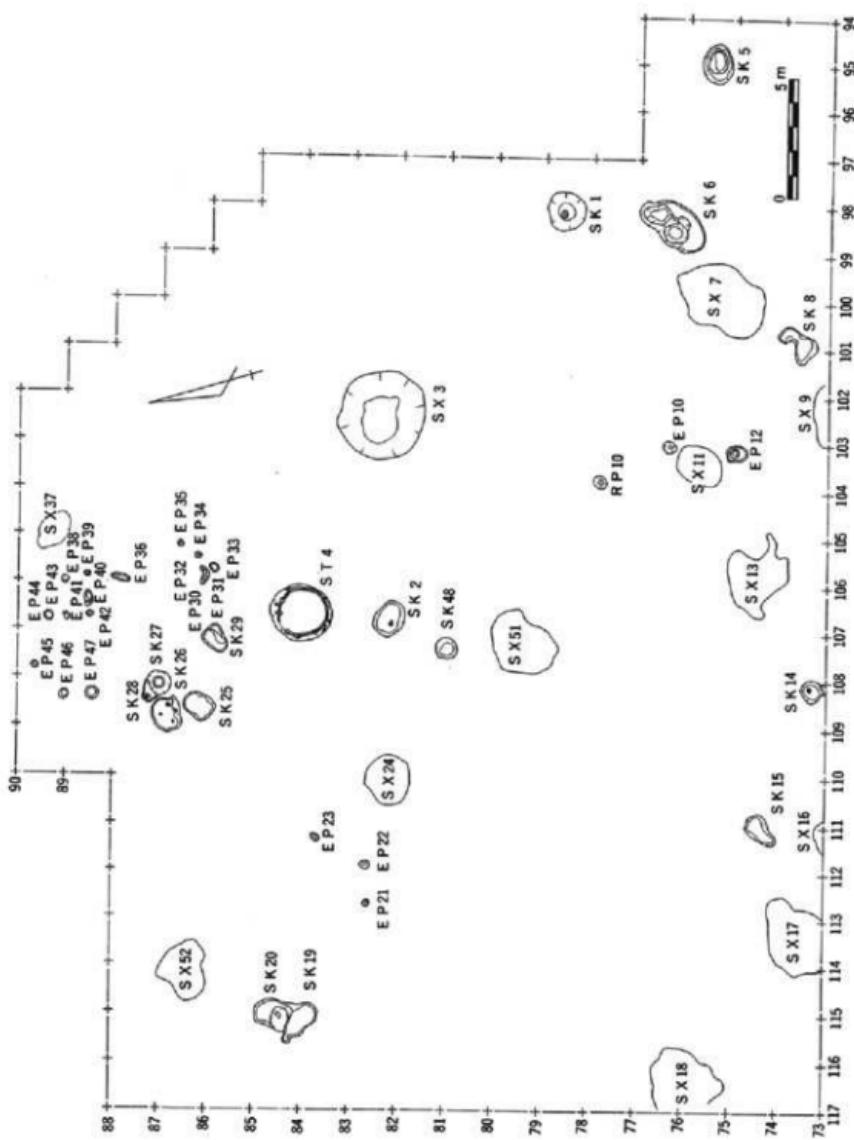
III層 茶褐色土 砂質性で褐色土・風化礫粒子を若干含む。IV層とは漸移的に分けられる。遺構確認面である。

IV層 黄褐色土 ローム質で風化礫粒子を多量に含む地山である。



第12図 来迎寺遺跡 土層図

第13図 来迎寺遺跡 遺構配置図



III 遺構(第14図)

4号住居跡(図版8)

84・85～107Gに位置する。平面形は、円形を呈し、直径264cm、深さ20cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、床面は若干の凹凸を有するが殆んど平坦である。壁際には幅10cm・深さ10cm前後の周溝がめぐり、北側で少し途切れている。また直径10～20cm、深さ10cm前後のピットを17本配置し、壁柱穴と考えられる。覆土は3層に分けられ1・2層黒褐色土、3層暗褐色土である。

14号土壤

109—74Gに位置する。平面形は略円形で、直径90cm、深さ1mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、墻底は凹を呈し直径20cm、深さ50cmの小ピットを有する。覆土は黒褐色・暗褐色土で構成する。

25号土壤

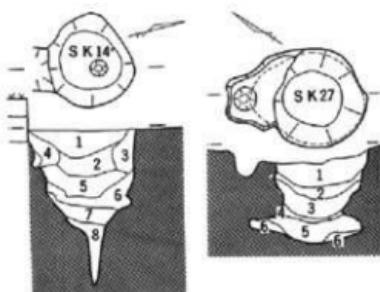
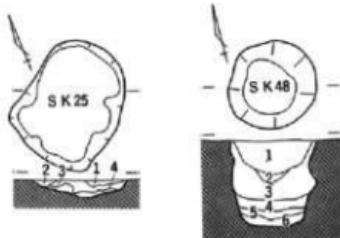
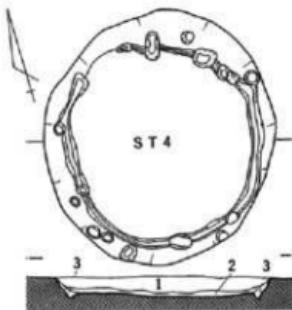
109—87Gに位置し、不整橢円形を呈す。長径130cm、短径100cm、深さ18cmを測る。覆土は4つに分けられ、黒褐色土を主体とし、縄文時代中期の土器を少量含む。

27号土壤

109—87Gに位置し、略円形を呈し、直径100cm、深さ120cmを測る。墻底は若干起伏を有し、横に張り出す。覆土は、暗褐色・茶褐色土で構成し、6区分できる。

48号土壤

108—82Gに位置し、円形を呈す。直径90cm、深さ88cmを測る。墻底は平坦で、壁面はやや屈曲するが、ほぼ垂直である。覆土は、6区分できる。



0 2m

第14図 4号住居跡・14・25・27・48号土壤

IV 遺 物

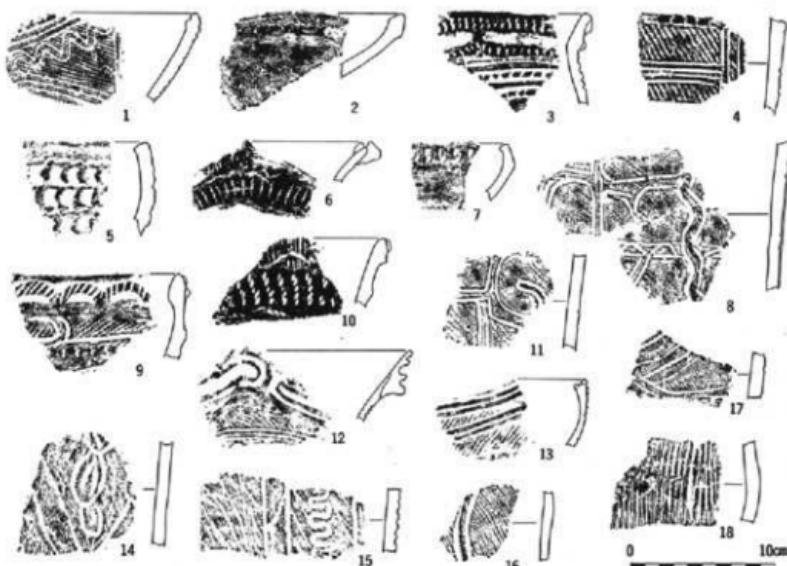
1 土 器

今回の調査では、整理箱で12箱出土している。包含層が攪乱を受けているため、ほとんどが小破片である。また、遺構内出土も少なくS×3、SK25等で若干出土しているのみである。時期的には、縄文中期・後期に分けられ、主として文様を中心以下のように分類できる。

第1群土器（第15図1～3） 縄文中期の土器群で撚糸圧痕・沈線・隆線等の文様を特徴とする。

a類 口縁部に半截竹管による平行沈線及び鋸歯状沈線文を施し、地文はL R斜纏文の深鉢。器形は、波状口縁で波頂部より垂下する沈線を中心に対称形のモチーフを描写するもの（1）と推定される。また（2）は、口唇部の肥厚する鉢形土器で、底部より直線的に立上する器形を示す。口縁部には、2条の撚糸圧痕が平行に施されている。

b類 平縁ないし波状の口縁部が外反あるいは内彎する深鉢土器群で、口縁部には短い縦方向の連続する撚糸圧痕（3・6・7・10）や一条の撚糸圧痕の下に数条の刺突文を施すもの（5）また部分的にゆるい満巻の入った沈線を施すもの（9）などがある。さらに口唇下に刻目あるいは撚糸圧痕を加えた弧状の隆線をめぐらす場合（6・9・10）もみと



第15図 来迎寺遺跡 出土土器

められる。体部文様は、縦横に直線的に走る沈線文を描き、頸部に数条の押引き沈線文を加えて口縁部と区画するもの(4)、垂下する隆線を貼付け、ゆるい渦巻ないし山形の沈線文を描くもの(8・11)がある。

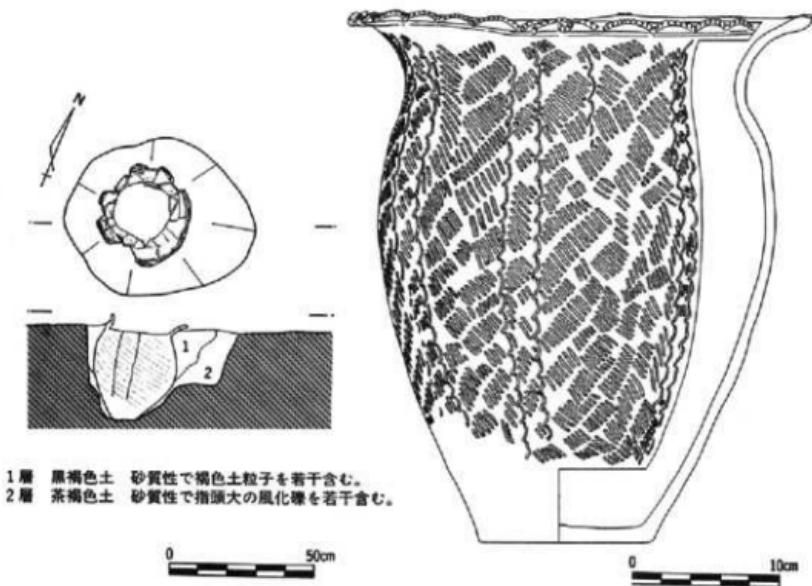
c類 口縁部に数条の沈線文を描き、頸部に数条の平行沈線を加え体部と区画する土器群(12・13)。

第II群土器(第15図14~17) 撫糸文に沈線文を描く、縄文後期土器群。

a類 撫糸地文に直線ないしV字状の沈線を描き、間にS字・波状の懸垂文を施すもの(14・15)。沈線間は粗く磨消されている。また、曲線文を描き、磨消しを施すもの(16・17)もみられる。

b類 撫糸地文の深鉢土器群。縦ないし斜走する撫糸文を施す。撫糸は条の粗いものと密なものとに分けられる。

兜形土器(第16図・図版8) 104-78GのIII層上面の精査中に検出する。埋設土器で正立状態で出土する。体部がゆるやかに立上り、頸部から外反する深鉢である。口唇下には刻目を加えた弧状の隆線が貼付けられ、体部にはLR斜縄文に懸垂する無節の縹絡文を2条9単位施文する。体部下半5cmは、磨きを加えている。分類では、第I群b類に入れられる。器高35cm、口径32cm、頸部径23.3cm、体部27.2cm、底径11.7cm、器厚0.6cmを測る。



1層 黒褐色土 砂質性で褐色土粒子を若干含む。
2層 茶褐色土 砂質性で指頭大の風化塊を若干含む。

第16図 R P 10埋設土器出土状況及び実測図

2 石 器

石器は、総数176点出土し、器種別では石鎌・石匙・範状石器・剝片・磨製石斧・凹石・磨石・石錐・円板状石製品に分けられる。石材は、硬質頁岩が主体を占め、他に石英・鉄石英・玉髓・黒耀石・流紋岩・安山岩・砂岩等が用いられている。

石 鎌 105—86G よりアメリカ式石鎌が、1点出土している。

石 匙 (第17図 1～3) 全て縦形のみである。刃部の形が鋭く切出し状のもの (1・2) と丸味のあるもの (3) とに分けられる。4点出土。

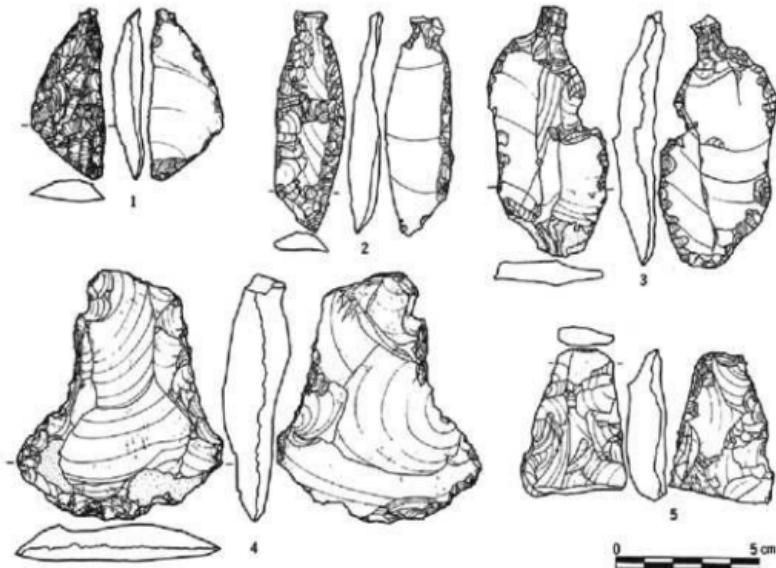
範状石器 (第18図 4) 短冊状のものと撥状のもの (4) とに分けられる。両面加工で厚味のあるものと薄手のものとがあり、断面形態は凸レンズ状を呈する。4点出土。

剝 片 石器製作によるフレークで、総数131点出土。

磨製石斧 (第18図 6～8) 定角的な形状を示し、基部・刃部を破損するものが多く、ソケット状に挿げられて使用されたことが裏づけられる。安山岩・流岩等の石材を用いている。7点出土。

凹 石 (第18図 9・10) 楕円ないし円形の河原石を用い、両面に凹を有する。磨石を二次使用したものもみられる。21点出土。

磨 石 (第18図 11) 河原石の一端ないし両面に、磨面を残す石器である。5点出土。



第17図 来迎寺遺跡 出土石器 (1)

石 錘 扁平な小石の両端を打ち欠き、糸懸かりを作出する。1点出土。
円板状を呈する石器である。直径4~5cm、厚さ1cm前後を測る。2点出土。

V まとめ

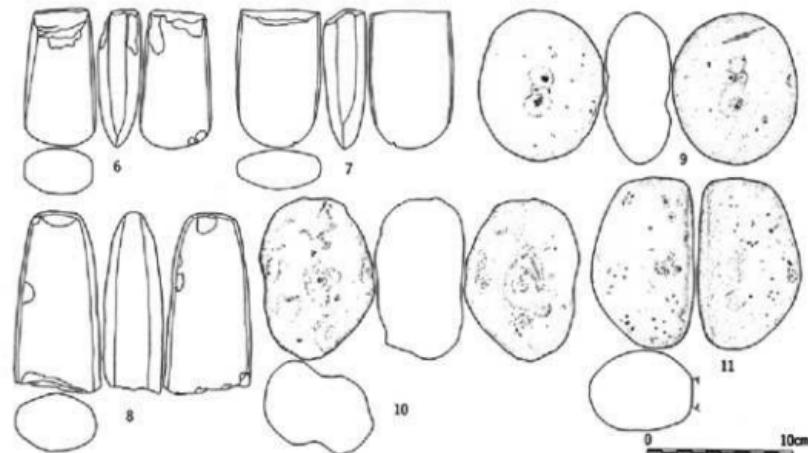
今回の調査は、遺跡範囲の南西側である。調査区域内は、かなり搅乱を受けており、遺跡の全体については把握し得なかったが、調査結果について以下のようにまとめられる。

検出遺構は、住居跡1棟・土壙15基・ピット21基・性格不明土壙12基である。このうち住居跡は、小規模なもので炉その他生活に関連するものが見当らないが、櫛引町三穂林E遺跡（註1）に類例がある。また14号土壙は、形態的特徴から落とし穴と推定される。

時期的には、縄文中期大木7b~8a式併行と考えられるが、全体に遺構内出土土器が少なく詳細な区分は困難である。

出土土器は、第I群a類が縄文中期大木7b式、同b・c類が大木8a式、第II群a・b類が縄文後期宮戸Ib式にそれぞれ併行する。また石器では、アメリカ式石鎚が出土しており、弥生時代の地点の存在が推定される。

註1 山形県教育委員会 「三穂林E遺跡」埋蔵文化財調査報告書第6集 1976年

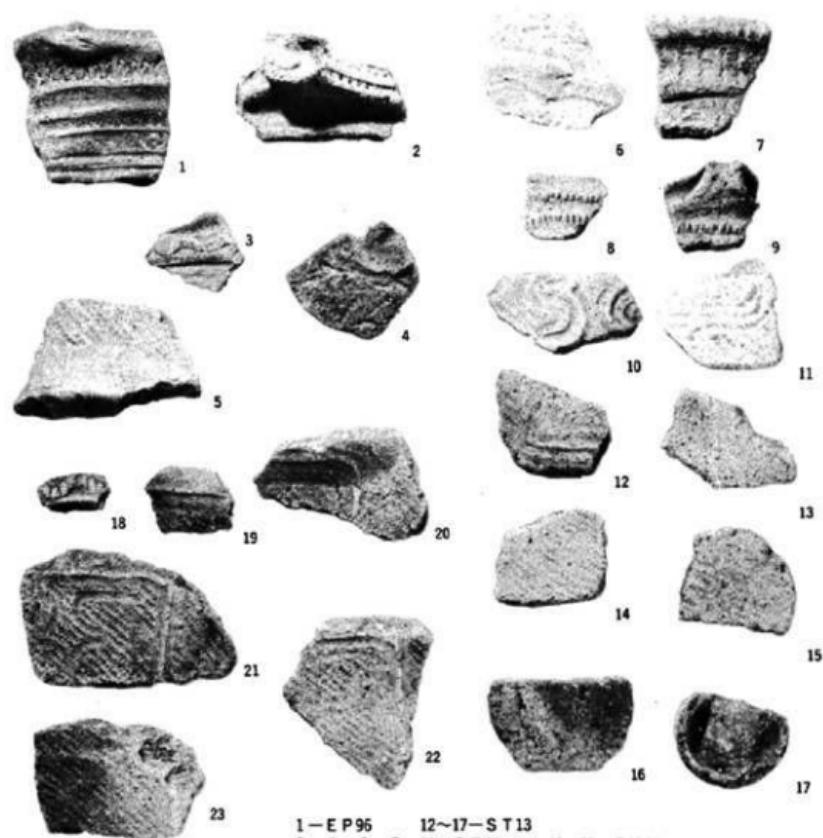


第18図 来迎寺遺跡 出土石器（2）

図版



熊の前遺跡遺景（小国川左岸から望む）



1-E P 95 12~17-S T 13
2~4+6+7+11-S T 44 18~23-S K 14

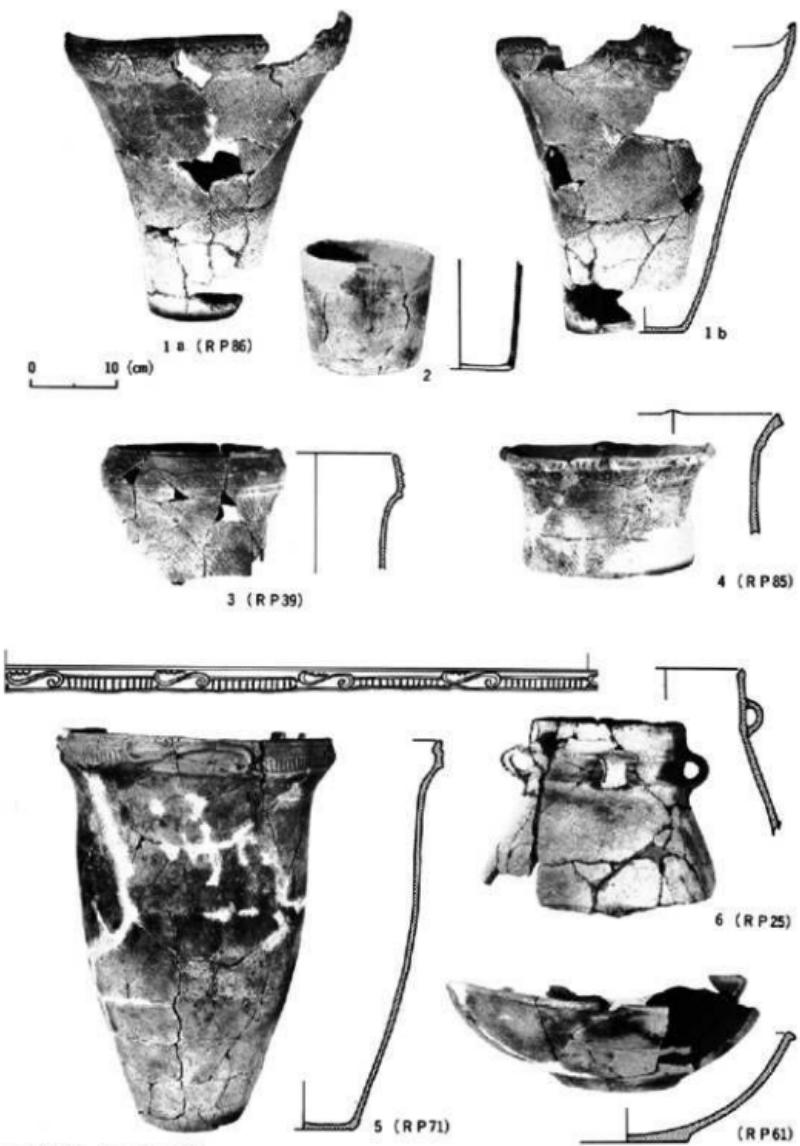
23

22

16

17

図版 2



熊の前遺跡 出土土器 (2)

* 図版2は縮尺を約1/6に統一して示した。図版3以下では、大きさを知るためにそのおおよその縮尺を示したものがある。

図版 3



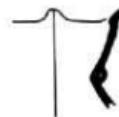
1 (RP64) 1/8



2



3 (RP57) 1/10

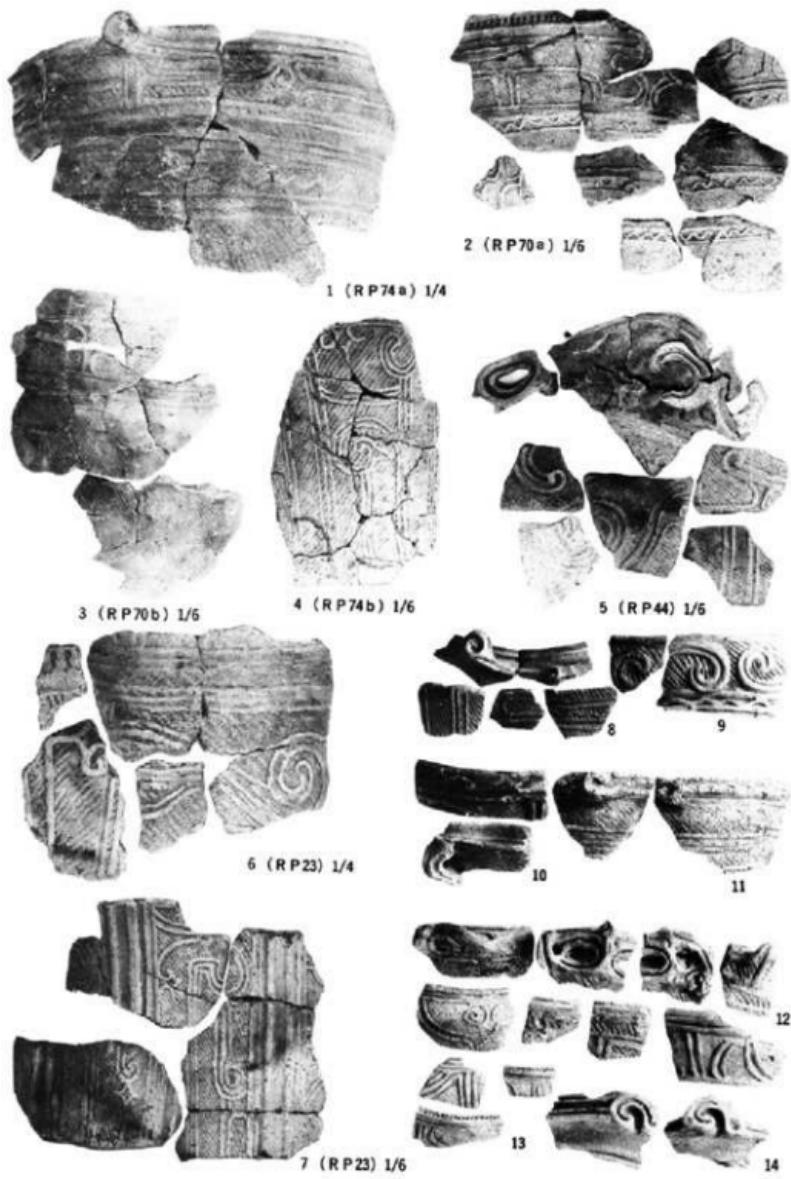


4 (RP46) 1/10

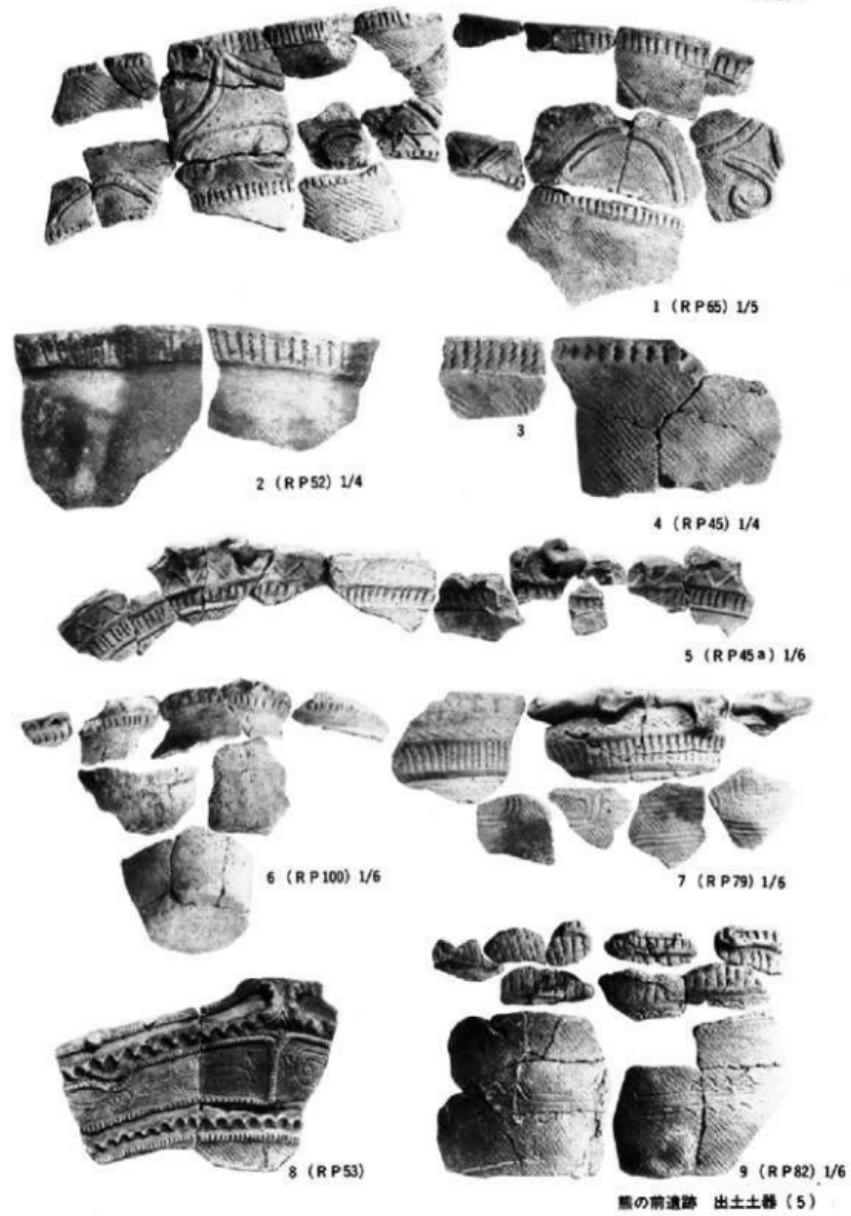
熊の前遺跡 出土土器 (3)



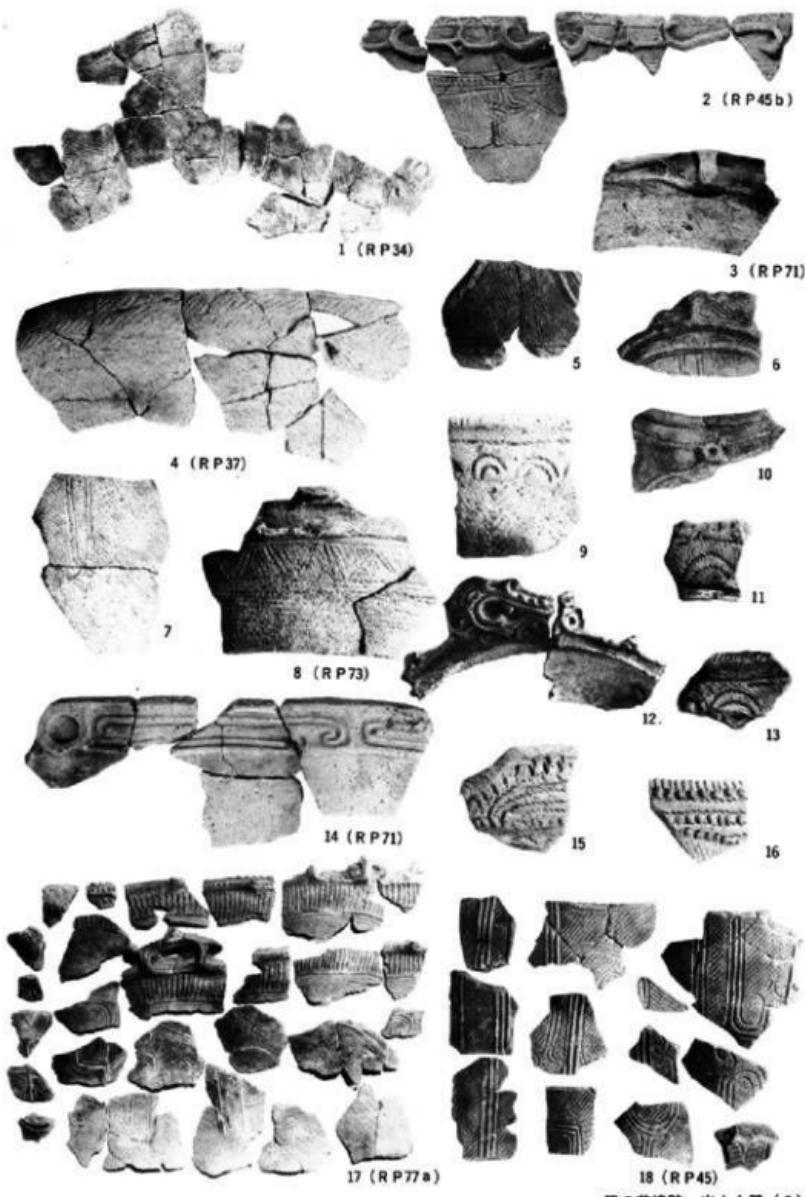
図版4



那の前遺跡 出土土器 (4)

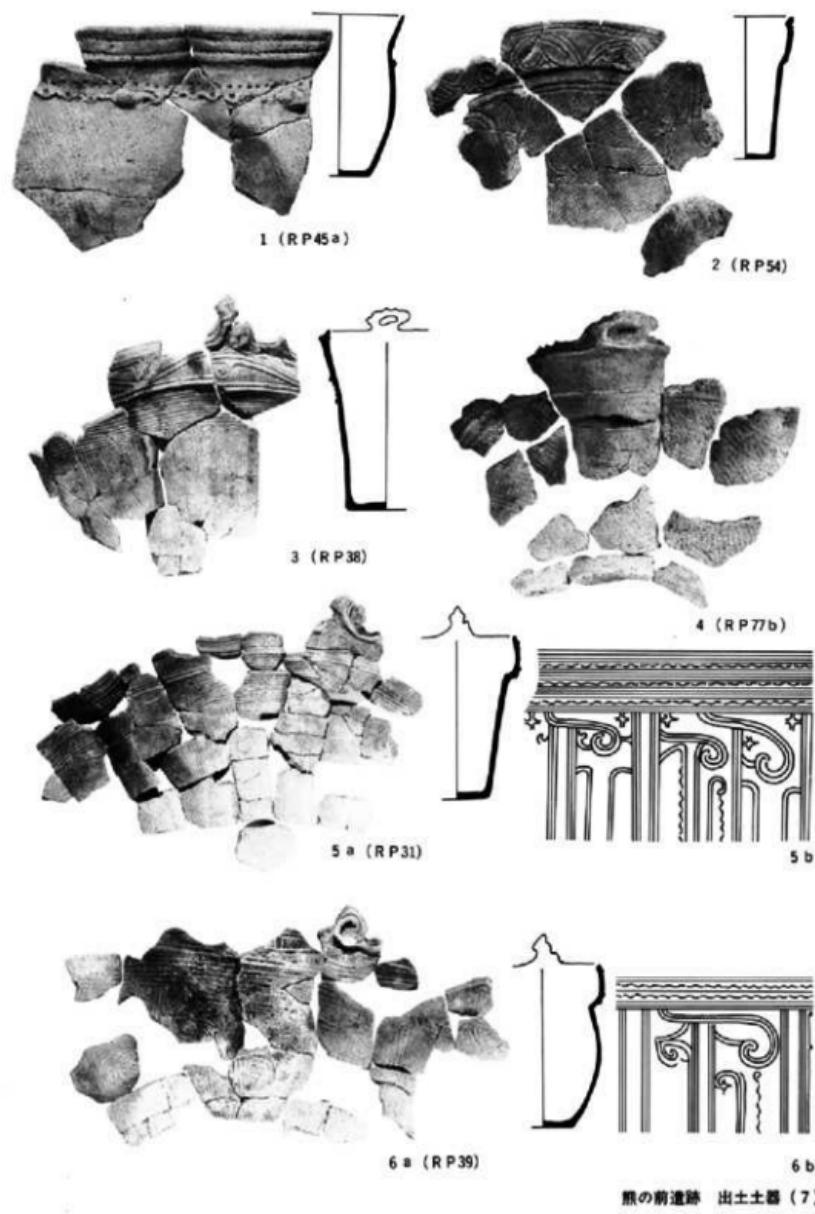


図版 6



黒の森遺跡 出土土器 (6)

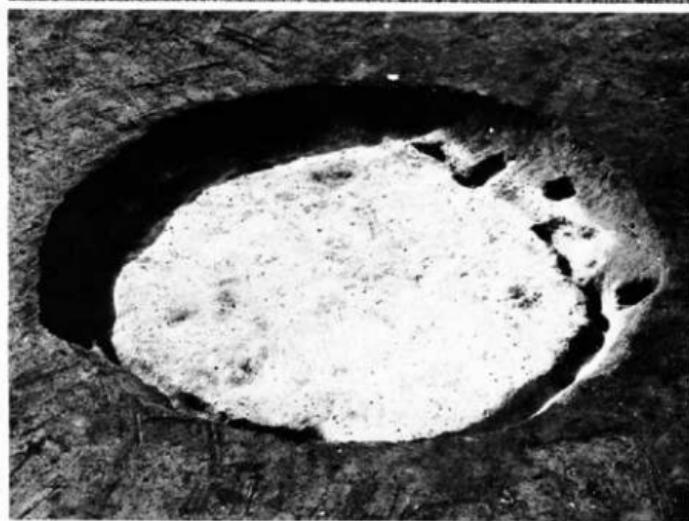
図版 7



熊の前遺跡 出土土器 (7)



来迎寺遺跡遠景(南側から望む)



4号住居跡



R P 10埋設土器

山形県埋蔵文化財調査報告書第34集

くま　まえ　らいごう　じ
熊の前・来迎寺遺跡
発掘調査報告書

昭和56年3月30日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 横大風印刷
